



国語科学習指導案

- 【授業者】 小迫洋子（府中市立第一中学校）
岡田真樹子（府中市立南小学校）
- 【单元】 相手意識を持って話そう！
- 【学年・組】 第一中学校 第3学年2組
南小学校 第4学年
- 【場所】 第一中学校
コミュニティスクエア

教科に関する調査の設問別の分析結果

平成25年度 「基礎・基本」定着状況調査の分析結果 中学校国語

【聞き取りの問題】

「公民館祭り」のボランティアを行う生徒に対する先生からの連絡を、第4グループのメンバーになったつもりで聞く。

当日は小さい子どもやお年寄りなどたくさんの方が来られます。困っている人には自分から声をかけるなど、思いやりのある態度で行動しましょう。また、地域の方々と積極的に交流し、自分たちも楽しんでください。

- 一. 2 先生は、今回ボランティアとして参加するにあたり、心がけてほしいことを二つ述べています。一つは、困っている人に自分から声をかけるなど、思いやりのある態度で行動することでした。もう一つはどのようなことでしたか。書きなさい。

《正答例》

地域の方々と積極的に交流し、自分たちも楽しむこと。

【出題の趣旨】

- ・ 話の要点を聞く。

【学習指導要領の内容・領域】

- ・ 第1学年 A聞くこと
(1) エ必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理すること。

正答率	平成25年度
本校	92.3%
広島県	89.5%

解答類型	1○	2△	3△	4	5	左記以外	無回答
本校の割合 (%)	66.9	16.9	8.46	0	0	6.15	1.54

この問題を解くために必要な力

- 話の要点を「正確に」聞き取る力。

誤答分析

- 通過率は92.3%と、県平均と比べて高いように見えるが、「正答率」は66.9%で、決して高い数値とは言えない。
- この問題は、「地域の方と積極的に交流すること」「自分たちも楽しむこと」の2つの内容を聞き取れて正答となっているが、片方だけを聞き取っている場合も「準正答」とカウントされる。本校の生徒の場合、この「準正答」が合わせて25.4%もいた。
 - ・ 解答類型2「地域の方々と積極的に交流すること」
 - ・ 解答類型3「自分たちも楽しむこと」

調査問題の分析をふまえた指導改善のポイント
平成25年度 「基礎・基本」定着状況調査の分析結果 中学校国語

【单元名】 相手意識を持って話そう！

調査結果からみる課題

【課題となる力】

- 正確に聞き取り，必要なことを適切に言語化する力。

【指導上の課題】

- 意識づけた時しか，「集中して聞くこと」ができていない。
- 国語で学んだことが，日常的な「聞くこと」につながっていない。

指導改善のポイント

**「聞くことへの意識を高める」
「日常的な“聞くこと”に近い場面
を授業内に作る」**

【指導の工夫】

- ① 「聞く力」と密接に関連する「話す力」を向上させることで，聞くことへの意識を高めた上で，きちんと聞かないと発話できない状況を作り出す。
- ② 日常的な「聞くこと」に近く，しかも正確に聞き取り相手に伝わるよう，適切に言語化せざるを得ない状況を作り出す。

① 「聞く力」と密接に関連する「話す力」を向上させることで，聞くことへの意識を高めた上で，きちんと聞かないと発話できない状況を作り出す。

【課題1】 グループ内スピーチ評価活動

- ◎ 《聞き手》スピーチの「よかったこと」「課題」を短い言葉でコメントする。
- ◎ 《話し手》受けたアドバイスを，その場で2回目のスピーチに生かしていく。

- グループ内で，《聞き手》《話し手》双方の立場になって，評価活動を行う。「きちんと聞くこと」が，どちらの立場になった時にも求められ，スピーチの上達にもつながることを意識させる。
- 大学生・大学院生との交流活動を設定し，「初対面の人に伝わる話し方をする」「もらったアドバイスを，その場で2回目のスピーチに生かす」活動に取り組む。それによって，「アドバイスを正確に聞き取り，それを具現化したスピーチをする」ことを意識させる。

② 「日常的な“聞くこと”に近い場面を授業内に作る」

【課題2】 小学生へのアドバイス活動

- ◎ 小学生のスピーチを聞き，そのスピーチの良かった点や課題を，小学生に伝わる言葉でアドバイスする。

- 「正確に聞き取り，その場の聴衆に合わせて，伝わる言葉で話す」という，日常生活のパブリックな場面での「話す・聞く」により近い状況を作り出す。
- 聞き取ったことをもとに，初対面の小学生に伝わる形で，「スピーチ上達のためのアドバイス」をする。

話すこと・聞くことに関わる事前アンケート結果
府中市立南小学校 第4学年児童

1. 全体の前で相手に伝えられるように話すことができているか

話せている	その理由	話せていない	その理由
12/30人 (40%)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 分かりやすく話せば納得するから。 ○ 先生にほめられたし、自分もすっきりするからちゃんと続けていく。 ○ 伝えたいことが伝わるとすっきりするから。 ○ 話すことが得意で、はりのある声で話す練習やスピーチの練習をしているから。 ○ みんなに伝わらなかつたらいけないから。 	18/30人 (60%)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自信がないから。 ○ 緊張するから。 ○ 全校児童の前に立つのは機会が少ないし、言い慣れていないから。ちょっとはずかしい。 ○ 友達にもう一度言ってくださいと言われる時があるから。 ○ 声が怒ったときでないと出ないから。

2. 「全体で話す」と「友達同士で話す」との違いは何だと思うか

- 言葉遣い(敬語)を使うところ。
- 声の大きさや話し方がちがうと思う。
- 一人だったら緊張感が出るけど、友達同士だと2人、3人とかいろんな人とと言えるからゆとりがもてる。
- 声の大きさやはずかしさが違うと思います。
- 友達同士だと信用できるし、言いやすい。全校児童の前では緊張してしまう。
- 全校児童の前では、です・ますなどの丁寧な言葉だけれど、友達同士では、です・ますを使わないところ。

3. クラスのみんなの前や全校児童の前で話すのは得意か

得意	その理由	不得意	その理由
6/30人 (20%)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 勇気を出して努力しているから。 ○ 全体の前に出て、お知らせを言うから。 ○ 話すことが好きだから。緊張したら深呼吸して緊張をなくしているから。 ○ 緊張するけど、ちゃんと伝えられていると思うから。 	24/30人 (80%)	<ul style="list-style-type: none"> ○ みんなで話すのが嫌いだから。 ○ 緊張するから。 ○ 挑戦しようと思うけどはずかしい。 ○ 何を言えばいいか分からないから。 ○ 自信がないから。 ○ 間違ったらどうしようと不安だから。

4. クラスのみんなの前や全校児童の前で話すのは好きか

好き	その理由	嫌い	その理由
8/30人 (26%)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表するのが好きだから。 ○ みんなが真剣に話を聞いてくれるから。 ○ 自分の話をみんなに伝えたいという気持ち強いから。 ○ 伝えるように言えて楽しいから。 ○ 自分の伝えたいことを言えるから。 	22/30人 (74%)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 恥ずかしいから。 ○ 緊張するから。 ○ 挑戦するけど恥ずかしいし間違えたらいやだから。 ○ 勇気が出ないから。 ○ はりのある声ができているから。

5. どんなことをすれば、話すのが上手になると思うか

- 練習することや勇気を出せばよいと思う。
- はりのある声で、できるだけつまらずにしたら上手になると思う。
- 友達とたくさん話して家など休み時間などに声出しの練習・はりのある声で話す練習をする。
- 授業で話すことに気を付ける。
- 授業の時にたくさん発表する。

6. 全校児童の前で話す機会がなぜ必要か

- 発表が得意になったら楽しく感じるし、みんなにほめられるから。
- 話が伝わると相手もうれしくなるから。
- 大人になって役に立つから。
- 大きな声で話す自分もいい気持ちになるから。
- 発表することはいいことで、自分の思い伝える時、上手だとみんなに伝わりやすから。
- 連絡やあいさつをしたらすっきりするから。
- みんなと仲良くできるし、どんな人とも話せるようになるから。

中学校第3学年・小学校第4学年 国語科学習指導案

【単元名】 相手意識を持って話そう！

単元観について

ここ数年、コミュニケーション能力の育成は声高に叫ばれ、中でもパブリックスピーキングの力をつけることは国語科の大きな課題となってきた。実際教科書でも、音声言語の扱いはずいぶん増えてきている。

しかし、本来パブリックスピーキングにおいて、必要不可欠とも言える「自分を演じる」ことは、ほとんど問題にされていないまま、「音声言語表現の授業」＝「知識・スキルの伝達」となっている観があることは、否めないように思う。

「パブリックスピーキングの力をつける」と言ったとき、我々がつけるべき力・目指すべきことは何なのかという前提に立ちもどって、本単元を設定した。

本単元は、「パブリックスピーキングの基礎(中学生は基礎から発展まで)」という位置づけで、小学生・中学生とも、

◎ 聴衆を意識した表現(相手意識の強い表現)をさせる

◎ 「自分を演じること」「切る表現」を意識させる

ことを活動目標としている。

ただ、同じ「相手意識を持つこと」を目指しても、当然のことながら求める水準は違っている。

学習指導要領では、中学校3年生での「話すこと・聞くこと」の目標を、「目的や場面に応じ、社会生活にかかわることなどについて相手や場に応じて話す能力、表現の工夫を評価して聞く能力、課題の解決に向けて話し合う能力を身に付けさせるとともに、話したり聞いたりして考えを深めようとする態度を育てる」としている。つまり、自分が、相手や場に応じて工夫して話すだけでなく、「相手の工夫が分かり評価できる力」までが求められているのである。

本単元では、これまで付けてきた力を基盤として、この、「相手の工夫が分かり評価できる力」を培っていく。また、本単元の学習には、「聞く力」の向上、「話す力」のさらなる向上が欠かせないため、基礎基本定着状況調査で課題が明らかになった、「正確に聞き取り、必要なことを適切に言語化する力」を高めていく力の向上にも有効であると考えている。

小学4年生は、他者を強く意識し始め、「友達と話すこと」と「人前で話すこと」の違いを感じ始める時期である。

学習指導要領では、小学校3、4年生での「話すこと・聞くこと」の目標を、「相手や目的に応じ、調べたことなどについて、筋道を立てて話す能力、話の中心に気を付けて聞く能力、進行に沿って話し合う能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら話したり聞いたりしようとする態度を育てる」としている。

児童はこれまで、「相手や場面に応じて話し方を変える」ことを無意識にしたことはあっても、意識的にそれをした、その必要性を感じたりしたことはほとんどないだろう。

本単元は、「相手意識を持って話す力」を付けていくための導入として、これからパブリックスピーキングの力を高めていくための基盤となる知識や力を付けていくことを目指していく。

多くの児童が、パブリックスピーキングに対する苦手意識を持つ前にこの学習をすることは、これから「話す・聞く」力を高めていく上でも有効であると言えよう。

本時の授業は、中学校3年生と小学4年生の異学年交流の形態をとっている。この授業形態そのものが、中学生・小学生双方にとって学びの題材であり、相手意識を持って、正確に聞き、話すことが求められる「場」となっている。

《中学生》

(1) 場の設定

生徒の中に「相手意識」を明確に立ち上げるために、様々な「相手」に向かって話す場を設定する。

まずは、本番と同じ形式での立ち練習によって、友達と教師への相手意識を持たせる。両者は同時にスピーチの評価者である。中学生にとって友達は、「一番わかってほしい相手」であると同時に、「素の自分を晒したくない相手」にもなり得る存在であるので、相手意識・自分を演じる意識を、「意識化」させる場でもある。

次に、大学生・大学院生との交流で、「初対面の大人」に伝わるように話し、アドバイスを的確に聞き取ることを意識づける。この交流は、「聞くこと」の有用性を意識させることも意図している。

小学生との交流では、「正確に聞き取り、その場の聴衆に合わせて、伝わる言葉で話す」という、日常生活のパブリックな場面での「話す・聞く」により近い形の状況を設定する。

(2) 題材

第1次～第4次では、長田 弘氏の散文詩「最初の質問」を用いる。「最初の質問」は、“質問だけ”でできている文章である。その中から「答えたい質問を選ぶ」という行動には、「その時の自分」が反映される。そしてそれは、他者との比較において明らかになる。授業では、その「他者」が「友達」であることから、「なぜその質問を選んだのか」を伝えること・知ることは、生徒にとって「授業」という枠組みを超えた興味の対象となり得ると考える。今回は、「選んだ理由」を「友達に向かってスピーチする」ことで、学習活動を仕組んだが、今後、「その質問に対する回答を作者である長田 弘氏に向かって書く」という、別の相手意識を立ち上げる授業も予定している。

第5次では、それまで学んできたことを生かし、より日常に近い形で「話す」「聞く」活動ができる題材として、「小学生にスピーチのアドバイスをする」という状況を設定する。アドバイスについては、これまで、もらうこともすることもしてきているが、自分達が用いるそのままの言葉では、小学4年生に「伝わる」アドバイスにならないので、「小学生に伝わる言葉」に置き換えて話す必要がある。正確に聞くことはもとより、これまで以上に、相手意識の強い表現が求められる題材である。

《小学生》

(1) 場の設定

児童のパブリックスピーキングに対する意識を明確にし、パブリックスピーキングにおける「相手意識」を立ち上げるために、

- 友達・教師に向けて話す
- 中学生に向けて話す
- 保護者に向けて話す

と、段階に応じて様々な「相手」に向けて話す場を設定する。聴衆を意識し、「誰に向けて話しているのか」を明確にさせることは、「相手意識を持った表現」の第一段階とも言えるだろう。「相手を変えること」そのものに意味があるのである。

(2) 題材

本單元では、第2次でのスピーチ、「ぼくの私のお気に入り」をゴール地点として、全ての学習をつなげていく。

第1次では、「だれでもかかわりあえるように」を学習し、その発展教材として「ユニバーサルデザイン」について、グループごとに調べてスピーチする。

第2次「ぼくの私のお気に入り」の学習は、「自分達は好きだけれども大人はその良さを今ひとつ分かっていない」と思うものを、グループスピーチさせる。そしてその本番は、「参観日に保護者に向かってスピーチ」という形で設定する。

小学生が興味を持っているもの、自分たちにとって必要不可欠だと思っているものというのは、とりもなおさず彼らの「文化」である。その、小学生文化を大人に向かって発信するという形態を採ることで、自然と相手意識を持たせる。さらに「分かってほしい」という気持ちを、対象を明確にした表現の工夫につなげていける。

生徒観・児童観について

《中学生》

昨年度の「基礎・基本」定着状況調査の通過率は76.7%であった。特に言語事項の平均通過率は、87.2%あり、今年度の全国学力・学習状況調査のA問題の正答率、82.4%と合わせ考えても、国語力をつけていくための基盤となる力は、ついてきている。

反面、課題として挙げられるのは、「内容を大まかに捉えることはほぼできているが、正確に把握する力がまだ不十分である」ということである。「聞くこと」においても、「読むこと」においても、「概要はわかっているが、細かい点までは把握しきれていない」傾向が見られた。問われている条件を正確に、またはすべて聞き取って（読みとって）、適切に言語化することができていないのである。

「基礎・基本」定着状況調査の「聞くこと」に関わる問題では、問われている二つの内容をきちんと聞き取り、適切に答えた生徒は66.9%であった。つまり、どちらか片方の内容しか答えられなかった生徒が25.4%、約4分の1もいたのである。

この課題については、昨年度から継続して取り組み、「意識させた上で」聞き取らせた場合には、正確に聞き取ることができるようになってきているが、意識化を図らないまま取り組ませた課題や、日常生活の中の聞き取る場面では、まだまだ正確に把握できているとは言えない

「話す力」「聞く力」は密接に関係しているため、本単元のこれまでの学習では、準備した原稿によって、「話し方」を身につけた。それによって、生徒達は、パブリックスピーキングに対する自信をつけてきている。第4次終了時のスピーチ評価票（スピーチ学習の振り返り）やアンケート結果からも、スピーチに自信がついたという意識が高まっている。

アンケートの結果では、「人前でスピーチをすること」は、「好き」「どちらかというと好き」な生徒は、両方合わせても30%しかいないのに、そのことに「自信がある」「以前より自信がついた」生徒は、両方合わせて77%と高い割合であった。

「好きとは言えなくても自信を持ってできる」という生徒が増えてきており、ほぼ全員が、自分のスピーチの力をさらに伸ばしたいと思っている。

《小学生》

本学級の児童は学習に対して意欲的で、課題解決に向けて解決策を考えたり、自分の考えを書いたりできる児童も多い。しかし、それを発表するとなると、苦手意識を持っている生徒が多いため、授業中の発表は、決まった児童に偏る傾向がある。

前掲の、話すこと・聞くことに関わるアンケートからも、「全体の前で話すのは恥ずかしい」「緊張する」という児童の意識が見て取れる。

また、「全校児童の前で話すことがなぜよいのか」という問いに対しては、「大人になって役に立つから」「発表するのはよいことだから」という、実感が伴わないステレオタイプの回答も多く見られ、伝わる（伝える）ことのよさや必要性を実感できていない実態が覗えた。「工夫して話した結果、自分の考えが相手に伝わった」喜びをあまり体験していない、またはその喜びが顕在化されていないと考えられる。

「友達と話す時と全体の前で話す時の違いは何だと思えるか」という問いからは、児童がパブリックスピーキングを、「言葉遣いや雰囲気が違う話し方」だと捉えていることが分かる。また、パブリックスピーキングでは、その雰囲気になじめず緊張してしまうので、自分の思いが言葉にできない実態があることも見えてきた。

児童は、パブリックスピーキングの力を身につけたいと思っているが、現時点では、「自信がない」「どのように言えばよいのか分からない」ため、授業中の発表等でも、積極的に活動できないと考えられる。

パブリックスピーキングが好きと答えている児童は、「自分の話をみんなに伝えたい」「伝えるように言えて楽しい」等、能動的に「伝える」と記述していることである。一方、「話が伝わりと相手もうれしくなる」「上手だとみんなに伝わりやすい」と記述している児童は、それが「嫌い」「苦手」と答えた児童である。

「伝わる」ためには「伝える」意識や工夫が必要だが、現時点では、多くの生徒はその意識が薄い

指導観について

表現活動の際の前提として、「子どもたちは根底には『わかってほしい感』を抱いている」ということを忘れてはいけない。それなのに語りが開けないのは、まず子どもたちの語りの技術が低いこと、そして何よりも、語りに伴うリスクが大きすぎる(語りには危険が伴う)ことが原因であろう。

しかし、小中学生が一番「わかってほしい」相手は、ほとんどの場合「友達」である。と言うことは、環境さえ整えれば、教室は、「伝えたい相手がそこにいる、『表現したい欲動』が一番立ち上がりやすい場所」であり、「パブリックスピーキングの力をつける」のに最適な場所だとも考えられる。

パブリックスピーキングにおいては、たとえ自らが自分のことを語るなのであったとしても、聴衆に向けて「演じる」ことが必要になる。「話す内容に合わせて、自分の中の『見せたい部分』を強調する」という「演じる」意識は、逆に「素の自分」が晒される恐怖から自分を守る「保険」としても作用し、生徒の中に潜在する「語りへの抵抗感」をなくしていくことにも役立っていくのである。

本単元のスピーチでは、相手意識・自分を演じる意識を持たせることを目標に指導していくが、その際重点を置きたいのが「切る表現」である。これは他者とのつながりを一旦切るということだ。音声表現の際には、生徒たちは不安もあって、チラチラ目を合わせたり目で笑いあったりと、なかなか互いの関係性を切れにくい。目に見えない「関係性」を断ち切って、独りで立つというのは、実際難しいのだが、表現は、互いの関係を一旦すべて断ち切ったところから立ち上がる。つながりを一旦切ることで、自分がどのように相手とつながりたいかを考える。ここから相手意識も自分を演じる意識も生まれると考えている。パブリックスピーキングの力をつけるためにも、本単元のスピーチでは、このことを実感させたい。

本単元では、「1時間でクラス全員が発表できる」ことを考えて、スピーチ原稿の文字数を「200字」に設定する。音声言語上達の場合、「場数」は大きなウェイトを占めるので、練習もなるべく本番と同じ形式で行い、授業そのものを、クラス全員が本番意識を持って練習に臨むための「装置」として機能させるように授業を作っていく。

実際に「話す」練習では、「スピーチに必要な3つの表情」として、「声の表情」「顔の表情」「身体の表情」を意識させる。それらは、個人個人がたてる「今日の目標」に反映され、教師の評価・自己評価・相互評価の目安にもなっていく。

まず、最初に意識させるのは、「身体の表情」である。原稿を覚えている段階の生徒が多いため、「たとえ原稿を見なくても話しているように見える身体の表情」を工夫させる。立ち方・姿勢・原稿の持ち方・原稿の見方・視線の方向等、ちょっとした工夫で印象は全く変わる。本番形式の練習をさせることで、児童生徒は他者のスピーチを見ながら、それを実感として学んでいくのである。

それが意識できたら、児童生徒の実態に応じて、「声の表情」「顔の表情」への意識付けを少しずつ図りながら指導をしていきたい。

音声言語指導は、ある意味「指導と評価の一体化」を一番実感できる分野だと考える。スピーチ指導の評価は、「その瞬間の勝負」で、評価言には端的で適切、かつ的確な言葉を選ぶことが求められる。そして実際にその一言で、生徒のスピーチは変わっていくからである。

意識しておかねばならないことは、その場での「評価言」は、個人に向けられたものでありながら、全ての生徒に影響するものだという点である。児童生徒は話し手であると同時に、「聴衆」として、それぞれのスピーチを聞いている。ということは、彼等は「話者」として教師のコメント(自分に対するものも他者に対するものも)を参考にする立場であると同時に、同じスピーチを聞いていた者として、教師のコメントが適切なものであるかどうかを評価する立場でもある。彼等が「評価者」としての教師を高く評価すれば、その教師の評価言は彼等にとって大きな意味を持つものとなる。さらに児童生徒が、「教師のアドバイスに従うと上手に話せるようになった」という実感を持てば、教師の一言の意味はますます大きくなっていくのである。

本単元では、児童生徒の相互評価活動、中学生から小学生への評価活動も仕組んでいるので、教師の評価言は、そのまま子ども達の他者に対する評価言となり、他者のスピーチを評価する際の「ものさし」となる。そのこともしっかり意識した上で、子ども達のスピーチに対して適切な評価ができるよう、指導に努めたい。

なお、「音声言語」という性質上、本時の授業では、「振り返り」も「発表(話しことば)」で実施する。数名が発表した後、「自分がこれからの学習に生かしていくこと・つなげていくこと」を2分程度でワークシートに書き込ませるといった形式をとる。これは、書こうとしても「言葉が見つからない」生徒が言葉を獲得することにつながり、支援を要する生徒への手立てともなっている。

《中学生》

「正確に聞き取り、必要なことを適切に言語化する力」を付けていくために、今回の学習では、単元を貫く言語活動を、「相手意識を持った交流活動」とし、生徒達の願いである、「話す力をより伸ばしていく」ために、しっかり聞いた上で交流することを意識づける。

これまで書くことの指導において、生徒同士の交流活動の機会を数多く作ってきたので、生徒達は、「互いに作品を読み合い意見を言い合うことは、自分の作品にプラスの影響を与える」という感覚は持っている。本単元では第4次までに実施した、「他の人のスピーチを評価する」という活動（一口コメント・グループ交流）を通して、他者との交流が、話す力の獲得においても有効であることを意識づけてきた。

相手意識をより明確にするため、6月には、広島大学の学生、大学院生との交流授業を実施した。「自分達のスピーチにアドバイスをもらい、それをよりよいスピーチにつなげていく」という活動である。これまで、友達と先生に対してしていたスピーチを、「初対面の大学生」にしたことは、「パブリックスピーキングに求められる相手意識」を立ち上げることに効果的だった。また、「もらったアドバイスを、その場で2回目のスピーチに生かす」ことが求められる活動は、「正確に聞き取って、必要なことを言語化する」力を付ける上でも有効であった。

本時の学習は、「初対面の小学生に対するスピーチ評価活動」である。スピーチの評価のためには、まずそのスピーチをしっかり聴くことが前提になる。そしてその、「瞬間に聞き取ったこと」を、短く、しかも分かりやすくまとめて話さなければならない。生徒達の大きな課題である、「細かいところまで正確に聴く」ことができなければ、アドバイスはできないわけである。

「自分達が、大学生にしてもらったことを、小学生にしてあげる」ことになるので、生徒達は、「どう動くべきか」というイメージを持って活動することができる。しかし、「小学4年生」にわかるアドバイスが求められるということは、より相手意識の強い表現をする必要がある。

授業そのものを、適切に聞き取り、聞き取ったことを、相手意識を持って話さなければならない状況を生み出す「装置」とすることで、日常生活のパブリックな場面での「話す・聞く」により近い形で活動させたい。

生徒達が目的意識・相手意識を持って交流に取り組めるよう、活動前の指示は適確にしていくよう心がけたいと考えている。

《小学生》

「誰に向かって話しているのかを意識し、工夫して話す力」を付けていくために、今回の学習では、単元を貫く言語活動を、「話し方を工夫して話す」とこととする。この「工夫」を段階に応じて変化させ、最終的には「相手に応じた話し方の工夫」を意識させるところまで高めていきたい。

第1次では、「だれもがかかわり合えるように」という教科書教材の発展学習として、「ユニバーサルデザイン」についてグループごとに調べ学習を行い、調べた内容を、はじめ(1名)・中(3名)・終わり(1名)の構成で分担してそれぞれ200字以内で原稿を書き、グループスピーチをさせる。全員の原稿を合わせて1つのテーマのスピーチになるようにすることで、必然的に協力したり話し合ったりする場面を作ると同時に、「自分達のグループの発表をよくするために」、互いのスピーチを聞き合い、アドバイスをし合う雰囲気を作りたい。

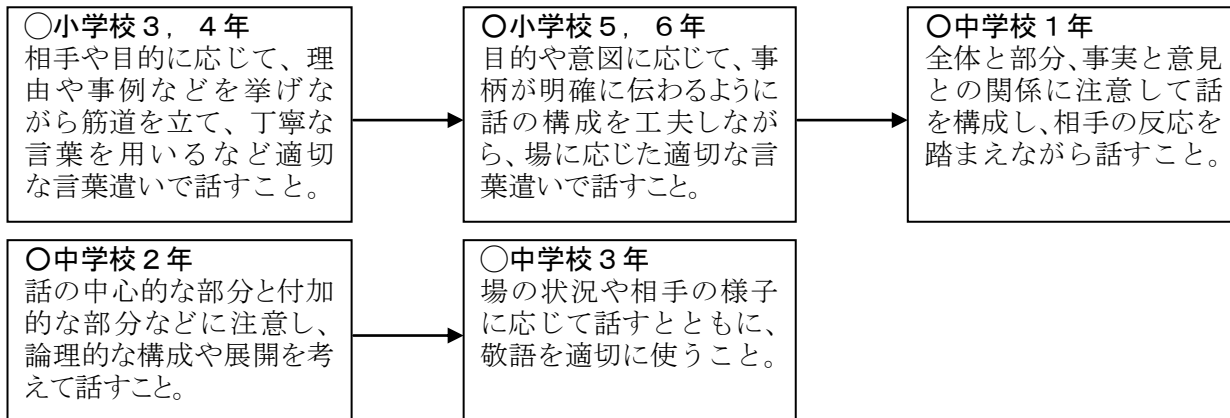
このスピーチは、言わば「動機付けのためのスピーチ」である。それゆえ、うまく話すための指導は、意識的にあまり行わず、「うまく(よりうまく)話せるようになりたい」という欲動を立ち上げるための意識付けに使うことを目的としたい。

第2次では、「ぼくの私のお気に入り」というテーマで、再度グループスピーチに取り組む。ここでは、「分かってほしいこと」を、「保護者」に向かって話すことで、伝えたいという欲動と、相手意識を同時に立ち上げることを意図している。相手意識については、本単元とつなげていくために、物語ガイドを書く学習の中で説明し、意識付けを図っている。スピーチの学習としては、ここで初めて相手意識・自分を演じる意識、3つの表情等、うまく話すための技術を伝え、到達モデルとして、中学生のスピーチビデオを見せる。具体的に中学生がスピーチをしているところを見せることで、到達点をイメージしながらスピーチに取り組むことができると考える。

「相手に応じた話し方の工夫」へと意識を高めるために、本単元では様々な場を設定し、聴衆を、友達・教師→中学生→保護者(大人)と変えることで、分かってもらうための話し方を考えざるを得ない状況を作る。

本時の学習は、「中学生からもらったアドバイスを自分のスピーチ上達に役立てる」活動だが、その前提には「中学生に伝わるように話そうとする気持ち」が不可欠であるため、「教室での友達・教師に対するスピーチ」とは違う意識が自然と立ち上がる。この、「中学生に伝えたい」という気持ちを大切にされた発話を心がけ、「保護者に分かってもらえるように伝えたい」気持ちにつなげていきたいと考えている。

～学習内容の関連（系統性）～



単元の目標

相手意識・自分を演じる意識を持って表現する。

指導と評価の計画

(1) 単元の評価規準

《中学生》

関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語についての知識・技能・理解
①他の人の表現を積極的に自分の表現の参考にしようとしている。 ②相手意識を持って言葉を伝える工夫をしている。	①相手の反応に注意して(相手意識を持って)話している。 ②一番伝えたい部分を意識して話している。 ③他の人の表現や意見を自分の表現に役立てている。 ④聞き取った内容や表現の仕方を評価し、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりしている。	①事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書いている。	/	①声の表情・顔の表情・身体の表情を意識して表現している。

《小学生》

関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語についての知識・技能・理解
①工夫をしながら話したり聞いたりしようとしている。 ②言葉を伝える工夫をしている。	①相手や目的に応じて、筋道を立てて話したり、話の中心に気をつけて聞いたりしている。 ②相手に応じた話し方を工夫している。 ③他の人の表現や意見を自分の表現に役立てている。	①相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べている。 ②調査内容や結果と自分の意見とを区別し、事実と意見の両方を入れて書いている。	①事実と意見との関係を考えて、文章を読んでいる。	①声の表情・顔の表情・身体の表情を意識して表現している。

(2) 単元指導計画

《中学生》(全16時間)

次	学習内容	時間	評価規準	評価の観点				評価の方法
				関意態	話・聞	書く	言語	
1	○どの質問に答えたいかを考え、原稿を書く。 ○原稿を友達と交流し、意見を言い合う。	4	①他の人の表現を積極的に自分の表現の参考にしようとしている。 ①事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書いている。	○		◎		ワークシート 観察 評価シール
2	○スピーチのための準備 ●スピーチの際掲示するフリップ<色画用紙に選んだ言葉を書いたもの>を制作する。 ●書き上げた掲示画用紙を黒板に貼り、スピーチの際と同じように前に立ってみんなに披露する。	2	②相手意識を持って言葉を伝える工夫をしている。	○				観察 作品(フリップ)
3	○スピーチ練習をする ●立ち練習 ●友達のスピーチに対する一言コメントを書く(教師とは逆の立場で) ●立ち練習をグループで批評し合う ●グループでの練習を大学生にアドバイスしてもらう。	5	①相手の反応に注意して(相手意識を持って)話している。		◎			観察 自己評価 相互評価 評価シール
			②一番伝えたい部分を意識して話している。		○			
			③他の人の表現や意見を自分の表現に役立てている。		◎			
			④声の表情・顔の表情・身体 の表情を意識して表現している。			○		
4	○スピーチ発表会を実施する。 ○ビデオを見てスピーチの評価(自己評価・相互評価)をする。	2	①相手の反応に注意して(相手意識を持って)話している。 ②一番伝えたい部分を意識して話している。 ①声の表情・顔の表情・身体 の表情を意識して表現している。		◎		○	観察 相互評価 自己評価 評価シール 評価票(振り返り)
5	○小中学生交流・小学生のスピーチにアドバイスをする。 ●これまでの経験から、アドバイスの際用いそうな言葉を挙げ、班で話し合っ、小学4年生にわかる言葉に置き換える。 ● 小学生との交流会(本時) ○交流での経験をふまえて、スピーチの学習を振り返る。	3	②相手意識を持って言葉を伝える工夫をしている。	○				観察 自己評価 評価シール 評価票(振り返り)
			④聞き取った内容や表現の仕方を評価し、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりしている。		◎			
			①相手の反応に注意して(相手意識を持って)話している。		○			

《小学生》(全17時間)

次	学習内容	時間	評価規準	評価の観点					評価の方法
				関意態	話・聞	書く	読む	言語	
1	<ul style="list-style-type: none"> ○「だれもがかかわりあえるように」を通読し、社会にはより多くの人々と関わり合うことができるように工夫された仕組みがあることを知る。 ○「ユニバーサルデザイン」について、グループに分かれて調べ学習をする。 ○分担してスピーチ原稿(200字)を書く。 ○スピーチのための準備をする。 <ul style="list-style-type: none"> ●テーマを伝えるために必要な提示資料を作る。 	4	<ul style="list-style-type: none"> ①事実と意見との関係を考えて、文章を読んでいる。 ①調査内容や結果と自分の意見とを区別し、事実と意見との両方を入れて書いている。 ②事実と意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書いている。 				○		観察 ワークシート 発表原稿 発表資料 評価シート
		3	<ul style="list-style-type: none"> ②言葉を伝える工夫をしている。 ①声の表情・顔の表情・身体表情を意識して表現している。 ①相手や目的に応じて、筋道を立てて話したり、話の中心に気をつけて聞いたりしている。 	◎				○	
		3	<ul style="list-style-type: none"> ○スピーチ練習をする。 ○スピーチ発表会を実施する。 ○ビデオを見てスピーチの評価(自己評価・相互評価)をする。 			○			
2	<ul style="list-style-type: none"> ○「ぼくの私のお気に入り」のスピーチに向けてグループ分けをする。 ○グループに分かれて調べ学習をして、スピーチ原稿(200字)を書く。 	4	<ul style="list-style-type: none"> ①調査内容や結果と自分の意見とを区別し、事実と意見との両方を入れて書いている。 ②事実と意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書いている。 			○			観察 ワークシート 発表原稿 発表資料 評価シート
		6	<ul style="list-style-type: none"> ①工夫をしながら話したり聞いたりしようとしている。 ②言葉を伝える工夫をしている。 ①相手や目的に応じて、筋道を立てて話したり、話の中心に気をつけて聞いたりしている。 ②相手に応じた話し方を工夫している。 ③他の人の表現や意見を自分の表現に役立てている。 ①声の表情・顔の表情・身体表情を意識して表現している。 	○	○	○	◎	◎	
	<ul style="list-style-type: none"> ○スピーチのための準備をする。 <ul style="list-style-type: none"> ●テーマを伝えるために必要な提示資料を作る。 ○スピーチ練習をする。 <ul style="list-style-type: none"> ●立ち練習をする。 ●ビデオで中学生のスピーチを見る。 ●グループでの練習を中学生にアドバイスしてもらう(本時) ○保護者に向けてスピーチ発表会を実施する。 ○ビデオを見てスピーチの評価(自己評価・相互評価)をする。 	6			○				
		6			○				
		6			○				
		6			○				

本時の学習

(1) 本時の目標

《中学生》

聞き取った内容や表現の仕方を評価し、相手の反応に注意しながら伝えることができる。

《小学生》

他の人の表現や意見を自分の表現に役立てていくことができる。

(2) 本時の学習展開

学習活動	指導上の留意事項	評価規準 (評価方法)	
1. 学習の概要とめあての確認【7分】			
<p>○ 学習の概要とめあてを確認する。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【めあて】</p> <p>中学生 小学生がもっと上手にスピーチできるような、アドバイスができる。</p> <p>小学生 友達のスピーチ・中学生のアドバイスを、自分の表現に役立てることができる。</p> </div>		
	<p>《中学生》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分達が大学生にしてもらったことを、小学生にしてあげてことを再確認し、1時間のイメージを持たせ、グループをリードしていくことを指示する。 ○小学生のスピーチを聴いて、適切なアドバイスを「小学生に分かるように」話すことが、自分のスピーチ(話すこと)の上達につながることを意識させる。 ○一ロコメントの記入用紙(グループ用)を事前配布。 	<p>《小学生》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○発表会に向けて、スピーチのレベルアップを図るために、今日の活動を行うことを確認し、中学生に伝わる話し方をするよう意識づける。 ○他の人がスピーチをしている時も、自分のスピーチ上達のための時間であることを意識させる。 ○前時の反省点を踏まえた目標を確認させる。 ○ワークシートを事前配布。 	観察
2. 班ごとに分かれてのグループ学習と全体発表【28分】			
<p>○自己紹介(名前のみ簡単に)。</p> <p>○スピーチ・評価活動</p> <p>1回目 小学生一人に対して中学生が二人ずつ(いいところ・直すべき所)コメントする。</p> <p>2回目 小学生は全員が続けてグループでの発表(本番どおりのやり方)をし、中学生全員がアドバイスをする。</p>	<p>《中学生》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中学生のリーダーに、進行を指示させる。 ○中学生が中心となって、「共感的な雰囲気」を作ることを意識させる。 ○1回目は個人に対して、2回目はグループに対しての評価をさせる。 ○いいところ→直すべきところの順でアドバイスをさせる。 ○「上手になってほしい」という気持ちで伝わる話し方を意識させる。 ◇「小学生に伝わる言葉を意識してアドバイスをしましょう」 	<p>《小学生》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○2回目は、中学生のアドバイスを生かしてスピーチすることを意識させる。 ◇「2回目は、1回目よりもレベルアップしたスピーチをするつもりで、しっかりアドバイスを聴きましょう」 ◇「他の人のスピーチのいいところもしっかり聴いて、自分の表 	<p>中【話・聞④】 小【話・聞③】</p> <p>観察 自己評価 相互評価 評価シール</p>

<p>○全体でのスピーチ</p>	<p>※伝わっていないように感じた時は言い直すことを指示する。周囲もサポートして、伝わる言葉で伝えることを意識させる。</p> <p>【共感的人間関係を育成する】</p> <p>○2回目は、役割分担（事前に決めておく）をして、「話し方」「つながり」「態度・発表マナー」についてアドバイスさせる。</p> <p>※ 中学生の「まとめ」活動</p> <p>○立候補が出ない時は、中学生に推薦させる。</p>	<p>現に取り入れましょう」</p> <p>○前に出て全体にスピーチする児童の立候補を募る。</p> <p>※ 小学生の「まとめ」活動</p> <p>【自己決定の場を与える】</p>	
------------------	--	--	--

3. 本時の学習を振り返る【15分】

<p>○小学生→中学生の順で、数名ずつ学習の振り返りを発表する。</p> <p>○発表を聴いて、感じたことも参考にして、ワークシートに「振り返り」を記入する。(2分程度)</p> <p>○中学生から小学生に対するメッセージ。</p> <p>○次時の予告</p>	<p>《中学生》</p> <p>○小学生にアドバイスをしたことが、スピーチの力（話す力）をつけていく上でどうプラスになったかを発表させる。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 20px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>【振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆「初めて会う小学生に伝わるようにアドバイスをするのは難しかったけど、今までより相手意識が強くなったと思います」 ◆「声の表情・顔の表情・身体表情は、スピーチじゃない時でも大事だと分かりました」 </div> <p>【自己決定の場を与える】</p> <div style="border: 1px dashed black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>支援を要する児童生徒への手立て…発表を参考にして「振り返り」を書く</p> </div> <p>○これまでの学習を振り返って、スピーチの勉強がどういうふうにならなくなったかを発表させる。</p> <p>○アドバイスの体験をふまえて、パブリックスピーキングについて考えることを予告する。</p>	<p>《小学生》</p> <p>○中学生からのアドバイスを受けて、代表者のスピーチを聴いて、これからどんなふうにならなりたいかを発表させる。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 20px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>【振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆「〇〇さんはみんなの方をしっかりと見ていて、話しかけられているような感じだったので、自分のスピーチに取り入れたいです」 ◆「中学生から、特に大事な部分は、心の中で二つ数えてから話し始めるというアドバイスをもらったので、これからは気をつけて話したいです」 </div> <p>【自己決定の場を与える】</p> <p>○今日の学習をふまえて、本番に向けての練習をしていくことを意識させる。</p>	<p>中【話・聞①】 小【話・聞③】</p> <p>観察 相互評価 評価シール</p>
--	--	---	---

相手意識を持って話そう！

めあて

中学生

小学生がもっと上手にスピーチできるような
アドバイスができる

小学生

友達のスピーチ・中学生のアドバイスを、
自分の表現に役立てることができる

◎ 意識すること

相手意識 ↓ 相手に伝わる表現・言葉

← (そのために)

三つの表情

○ 声の表情

○ 顔の表情

○ 身体の表情

まとめ

中学生 二回目のアドバイス

小学生 全体へのスピーチ

振り返り

中学生

小学生にアドバイスをしたことが、スピーチの
力をつけていく上でどうプラスになったか

小学生

これからどんなふうにスピーチしたいか